活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第14号/平成18年7月28日発行　青森県立保健大学広報誌

平成17年度卒業式

平成18年度入学式

新入生合宿研修

オープンキャンパス

CONTENTS

学長挨拶……2
副学長就任挨拶・事務局長就任挨拶……3
新入生歓迎挨拶……4
新入生のことば……6
上級生のことば……8
新入生合宿研修……10
海外授業（オーストラリア）……12
国際交流関係……13
障がい者の生涯学習の保障に関する政策研究……14
自治会・サークル活動紹介……15
就職関係報告……16
卒業証書学位記授与式/卒業記念パーティ……18
卒業生からのメッセージ……19
特色ある教育/人間総合科学演習……20
つゆき号寄贈/金曜料理教室……21
進学相談会・オープンキャンパス……22
人事異動……23

［学長挨拶／新入生歓迎のことば］

生命の尊重さを基盤にした豊かな人間性の涵養を

青森県立保健大学
学長
新道　幸恵

皆様ご入学おめでとうございます。本学を選択し、無事難関を突破して今日の日を迎えられました学部の新入生及び編入学生、研究科の新入生の計210名の皆様を教職員一同心より歓迎致します。

さて、我が国の少子高齢化の急速な進展や医療経済の逼迫は保健医療福祉の諸制度に大きな変革をもたらしており、高度な専門性を備えた人材の必要性が高まってきております。本学ではそのような社会のニーズに応えて、豊かな人間性と高度な専門性を基盤にしてヒューマンケアを提供できる保健医療福祉の専門職者や高度専門職業人、教育・研究者の育成を目標としております。従って、新入生の皆様のうち健康科学部に入学された方は看護師、保健師、助産師などの看護職や理学療法士、社会福祉士などの専門職者を、また博士前期課程では高度専門職業人を、博士後期課程では大学などにおける教育者や研究者を目指して学修されることになります。

学部と研究科では卒業や修了時点における期待される能力が大きく異なっていますので、教育目的や目標が異なりますが、教育理念は共通であることは言うまでもありません。本学では、豊かな人間性と高度な専門性に基づいてヒューマンケアを提供できる人材の育成を教育理念としています。人間性の豊かさということについては様々な考えがあります。しかし、本学では、人間性の豊かさの根本は、人の命を畏敬し、人を尊重するという価値観をもって行動し、専門職としてのケアの実践に生かすことができることであると考えています。保健医療福祉の専門職は人々の命に直接向き合い、時にはその危機的な状況に立ち会います。また、人々の生活に深く関わり、プライバシーにふれることが少なくはないのです。そのような専門職だからこそ、豊かな人間性が求められます。実際に専門職として人々に関わるときには、専門的な知識に基づいた判断力や価値観及び高度な技術を用いてケアを行うことになります。そのケアが相手に満足をもたらす質の高いものになるか否かはケアを提供する人の人間性にかかっていると言っても過言ではないでしょう。

豊かな人間性は、人の命の意味、即ち人の命の生理的、心理的、社会的な意味やその生成過程等への深い知識、“人間”への関心と理解や洞察、さらには人々との交流や自分を知ることなどによって培われるものです。

本学におけるこれからの学生生活のなかで、人に出会い、知識に出会い、経験に出会い、自然に出会い、というように様々な新しい出会いがあることでしょう。そのような出会いに真摯に向き合い、或いは求めて、多くの学びをされることを期待しています。

厳しく、豪雪に長く苦しめられた冬も終わり、冠雪の八甲田山の麓のこのキャンパスは色とりどりの花で彩られ、木々の若葉が清々しい生気を漂わせています。青森の四季の移り変わりのように、皆様方のキャンパスライフは厳しいときも晴れやかなときもあることでしょう。しかし、その経験が皆様方の人間としての力を養い、強さを身につけることにつながることを祈念しています。

［副学長就任挨拶］

副学長就任にあたって

副学長
上泉　和子

保健大学に就任し８年目を迎えるこの春に、副学長を拝命しました。開学と同時に本学に着任しましたので、大学も今年８年目を迎えます。ふりかえれば、大学開設準備から、開学、研究センターや教育センターの開設、大学院の開設など、短期間に多くのチャレンジをしてきましたが、成果もまた着実に示してきたと自負しています。この春には４期生が卒業しましたが、最初の卒業生は就職して４年目となります。そして保健医療福祉の現場で、成長し一人前として働く卒業生に会う機会も多くなりました。大学院の修了生はもとの職場であるいは新しい役割を得て、それぞれ活躍しています。たいへんうれしいことです。みんなが元気にたくましく自分の道を進めることを念じています。時勢はいまめまぐるしく変化しています。保健医療福祉の領域もまたしかりです。このような時代に保健医療福祉に携わる人材を養成する大学の一員として、その役割と責任をしっかりと胸に刻み、優れた人材の輩出に努力していきたいと考えております。

本学は、今、法人化という大きな変化を目前にし、組織や大学の事業など、さらに変化を求められています。本学の校歌は「新たな未来へ」というタイトルですが、その一説に「信じ合う　喜びにあふれる明日へ　幾つも　時代を乗り越えよう　この胸の　大空に描いた夢に　翼、広げるように　飛び立つよ　新たな未来へ」と、あります。どのような組織体制になろうと、本来大学の機能としてある教育、研究、地域（社会）貢献において、進む道を見失わないよう、これからの時代を乗り越え、新たな未来をみんなで描くことができればと思っております。

［事務局長就任挨拶］

三年ぶりに復学？再入学？

事務局長
小山石　康雄

今から７年前の平成11年4月の人事異動で本学の事務局次長に発令されました。

つまり、本学の開学時から事務局勤務を命ぜられた訳ですが、県として、四年制大学を運営するのは、未知の分野であり、結果として、開学当初から、全て、手探りの状態で、試行錯誤の繰り返しだったように思います。

特に、教員の皆さんに対しては、県立施設であるが故に、県の様々な規則の制約を受けざるを得ないことを理解していただく為に最大限の努力を傾注し、一方では、県本庁に対しては、大学という従前の行政組織とは異質な組織を円滑に運営していく為に、いかに既存の規則が支障になっているかを訴え続けてきました。

そして４年が経過し、第一期生と一緒に卒業？したつもりでした。

しかし、今回の人事異動で事務局長を命ぜられ、再度、保健大学に戻って参りました。

私が戻るまでに、３年の月日が流れましたが、その間、本学は着実に発展を遂げ、学生の就職状況も順調に推移し、大学院も設置されるなど、今後、さらに飛躍が期待されている状況を知り、心強く思っております。

一方、行政改革の波は、本学にも確実に押し寄せており、地方独立行政法人化が最大の課題となっております。

私としては、この法人化移行のための準備が、スムーズに行われるために、事務局としての役割が十分果たせるようにすることが、重要であると認識し、毎日「身の細る？」思いをしております。

英語の本の安直な読解力の付け方

人間総合科学科目教授
羽入　辰郎

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。入学式のスピーチで言い残したことをお伝えします。本学の目玉の一つが完全なネイティブ教師による英語教育であることは、お話ししました。会話力は恐ろしく付きます。あとは、英語の本を読む力だけです。ところが、こればかりは残念ながら本学のカリキュラムでは付きません。そこで、かなり安直な、但し読む力だけは抜群に付く方法をお教えします。まず、英訳本で面白い本を見つけます。高尚でない柔らかい本がいいです。但し、小説は知らない単語が多過ぎることになるので避けて下さい。何度も読んでも面白く、ほとんど内容が頭に入ってしまったら、原書を入手します。（原書はネットでAmazonで入手するのが早いです。日本語の本も、この近辺は大規模書店や古本屋街がないので、Amazonが便利です。）そしたら、そばに訳本を置いて、原書をいきなり読んでいきます。英語を読んでいるのか、英語を見て訳本の内容をただ思い出しているだけなのか、どっちなのか分からないような状態になるはずです。知らない単語が出てきても、翻訳で頭に入っているので、大体の意味の推測は出来るでしょう。ですから、分からない単語が出てきても気にせずに、辞書は引かないで下さい。（この、前後の文章から分からぬ単語の意味を推測してしまう力を付けることが大事。）どうしても分からなくなったら、辞書など引かず、訳本を見てしまいます。分かったら、またどんどんスピードを上げて読んでいきます。この時、頭のなかで日本語に変換してはいけません。英語のままで理解します。辞書を引くのは、訳本を見ても構文が取れない時に限ります。単語は分からなくても何ら構いませんが、構文は正確に把握出来ないと駄目です。逆に言いますと、構文の読み取りさえ間違えなければ、大きな誤訳はしません。この調子で、二冊目、三冊目…と次々読んでいきます。目の動くスピードで英文が理解出来るようになった頃には、訳本なしで原書が読めるようになっているはずです。電車の中でペーパーバックを読んでいたりすると、結構恰好良いです。但し、こんな安直な方法があるということは、高校の英語の先生には言わないで下さい。

4年後の姿を思い描いて

看護学科教授
石鍋　圭子

ご入学おめでとうございます。これから紹介するのは、皆さんの４年後の姿、看護専門職として卒業時に備えていて欲しい能力です。看護学科のカリキュラムはこれらの能力が身につくように組み立てられています。

・まず、ナイチンゲールをはじめとする先人達から看護理論を学び、仕事に対する価値観や信念、いのちや人間に対する自らの考え方をもてるようにします。

・看護は受け手がいて初めて成り立ちます。受け手は病人や高齢者に限らず、地域に生活し健康に問題をもつ全ての人たちです。皆さんは受け手である人間の身体や心、その人の生活を的確に把握・理解し、ケアとして受け手に働きかけるために必要な知識・技術・態度を学びます。看護の提供者と受け手が一緒に健康をめざすことができる能力を身につけるためです。

・看護者は、受け手の病気や健康に対する考え方を尊重しなくてはなりません。また、家族や地域社会についての理解も必要です。さらに、保健医療福祉の一員として、他の専門職と協働できなくてはなりません。そのためには、看護の受け手とのよい人間関係が作れ、コミュニケーションがはかれる能力が基盤となります。

・１年次から４年次まで多くの時間が費やされる実習では、Safety、Service、Smileの３Ｓが重要です。看護はいのちを守ることを第1に、いのちを育み、いのちを看取る仕事です。安全への配慮と、医学的知識など根拠に基づいた的確なサービス、思いやりある微笑が欠かせないからです。

・看護師の役割はいろいろな場に広がっています。４年間の看護基礎教育を基盤にどの方向に進むかこれからの学習を通して選択できる力をつけていきましょう。大学生活は、楽しいこともあれば苦しいこともあるでしょう。雨にも雪にも負けないで、今日皆さんの胸の内にある熱い志をぜひ実現させてください。

三つの提言

理学療法学科講師
桜木　康広

ようこそ青森県立保健大学健康科学部理学療法学科へ。期待に胸を膨らませて入学してきた８期生25名の皆さん！本学でのキャンパスライフはいかがですか？私は皆さんの担任として自らの経験を基に、3つの提言をしたいと思います。

１．出会いを大切に

保健・医療・福祉の現場に行くと笑顔ひとつ、声かけひとつで、とても喜んでくれる患者さん、利用者さんがいます。自分が差し伸べた、ちょっとした関わりが、実は自分を癒し、元気づけてくれるのです。自分の周りを見渡してみましょう。あなたは、家族、友人、先輩、教職員など、見えないところで多くの人に支えられています。感謝の気持ちと謙虚な心を持ち、感性を大事にしながら、人脈を紡いで下さい。

２．失敗から学ぼう

昔から「失敗は成功の母」という格言があります。失敗しても、それを反省材料として欠点を改めていけば、必ず成功に繋がるということです。人間というのは「ミスをするようにできている」と考えることによって、自分や他人の失敗を受け入れることができ、そこから学ぶことができるのです。学生時代に挫折を味わって、自分の人生の自信に繋いで下さい。

３．夢を追い続けよう

夢の実現を追求することで、輝いて生きることができます。近代国家を築いた明治時代の実業家、渋沢栄一氏の「夢七訓」では、一．夢なき者は理想なし、二．理想なき者は信念なし、三．信念なき者は計画なし、四．計画なき者は実行なし、五．実行なき者は成果なし、六．成果なき者は幸福なし、七．ゆえに幸福を求むる者は夢なかるべからず、と述べています。

さあ、３つの提言を噛み締めながら、４年間一緒に成長していきましょう。

ご入学おめでとうございます

社会福祉学科教授
渡邉　洋一

ご入学おめでとうございます。これからの四年間は長い「学び」の時ですが、無為に過ごしていると卒業する時を迎えてしまいます。初心を忘れることなく、この入学の時の想いを継続されることをお願いします。

社会科学は、「社会」という‘social’なものを対象にして、個人と集団と組織を基軸に科学的なアプローチをすることです。その「社会的なるもの」の視点には、抽象的な社会を対象とするものでだけではなく、「地域社会」を基軸に具体的・臨床的にもアプローチすることが求められています。

県立保健大学の社会福祉学科は、自然科学系の看護学科や理学療法学科とは異なり、「社会的なるもの」を中心として、「援助」や「支援」や「介助」についてソーシャルワーカーとしての「学び」をすることとなります。社会福祉学科では、具体的な身体的・精神的な援助の技術を学ぶこととなりますが、前記した「地域社会」の課題として、「福祉のまちづくり活動」や「福祉の心の醸成」も社会福祉学科での「学び」の大きな柱です。

大学生活は、講義という、高等学校などの授業とは性格を異にする「学び」が中心となります。社会福祉学科では、「社会福祉の実習・演習」や「ゼミナール」など講義方式ではない時間が多くあります。また、サークル活動や大学以外の活動への参加も大切な「学び」です。この四年間の時間の集積が、社会での働く時の基礎となるわけです。この「学び」には、おおせいな好奇心による積極的な姿勢が大切です。この好奇心を豊かなものとして新入生の「学び」が進展することを祈っています。

出会いを大切に

看護学科１年
髙橋　由美子

４年前に准看護学校に入学し、そのまま高等看護学校に進学、もっと学びたいという気持ちが強くなり、大学進学説明会に出向いたのが保健大学に入学するきっかけとなりました。社会人入試を決意するまでにはかなり悩みましたが、オープンキャンパスなどで大学を訪れ、先生方や事務局の方の話を聞き、この恵まれた環境で一から学びたいと思うようになりました。

入学して早いもので２ヶ月が過ぎようとしています。ゼミ、週４日のネイティブ・スピーカーによる英語、そして看護、理学療法、社会福祉の３学科合同の保健福祉概論など、保健大学ならではの授業も始まりました。さまざまな課題などもあり、家事に勉強にと一日があっという間に過ぎていきます。気がつけばソファーでうとうとし、朝を迎えてしまうこともしばしばです。

しかし、医療はますます高度化、専門化していく一方で、疾病を重視した医療もさることながら、ヘルスプロモーションを中心とした保健が重視されるようになっており、医療・保健・福祉における看護職者の役割がますます重要になってきています。４年後には地域医療に貢献できる看護者となれるよう、同じ志を持った仲間とともに、頑張っていきたいと思います。

この2ヶ月を振り返って

理学療法学科１年
大澤　里美

早いもので、保健大学に入学してから２ヶ月が過ぎました。初めは不安も多くありましたが、様々な学校行事を経験するにつれ、随分解消されたと思います。最近では講義もいよいよ本格的になってきて、段々大学生活らしくなってきたと感じております。

大学での講義は専門的であり、無駄なものがなく、一つ一つが重要な意味を持っています。毎日の講義が発見の積み重ねで、気を抜くことが出来ません。ある授業の内容が別の授業で応用されていることに気づくたび、それを実感しています。その大切さを理解するにつれ、これが将来、保健・医療・福祉に携わるものの重みかと思うようになりました。そして理学療法学科だからといってその分野だけを学べばいいというのではなく、他分野に関する事柄や語学など、様々な知識を身につけなければならないと、気の引き締まる思いです。

これからは講義の密度もより増して行き、試験やレポートに忙しい日々になることと思います。ですが、初志貫徹を目標に、最後まで充実した学生生活を送れるよう、頑張って学んで行きたいと思います。

新たな出会い

社会福祉学科１年
中山　美里

私が青森県立保健大学に入学して、早くも２ヶ月が経ちました。入学前は新しい生活への期待はありましたが、その期待よりも、初めての１人暮らしやこれからの大学生活に対する不安でいっぱいでした。しかし、私が感じていた不安も新入生合宿研修をきっかけに、徐々に消えていきました。先輩方や先生方からさまざまなアドバイスを頂き、授業やレポート、サークル活動などについて詳しく知ることができ、安心感を得ました。また、たくさんの友達を作ることができました。これはとてもいい出会いの場になり、皆で楽しい時間を過ごすことができました。

私は自分の意見を主張することが苦手です。なので、自分では思いつかなかった意見や、自分とは異なる意見を知ることができるゼミの時間が、私にとって非常にプラスになっています。また、普段の生活でも友達から多くのことを学んでいます。自分に無いさまざまな考え方を持つ人と出会えて、改めて保健大学に入学してよかったと感じました。福祉の専門職に就くからには、もっと多くの出会いがあります。その中でどんどん自分の考えを広めていき、いろいろな立場に立って考えられ、社会に貢献できる人になることを目指して頑張っていきます。

保健大学に入学して

編入学生：
社会福祉学科２年
吉田　真由子

青森県立保健大学に入学して、早いもので２ヶ月が経とうとしています。以前私は、北海道の大学に在学していたのですが、青森県立保健大学に入学してまた新たな気持ちで、毎日緊張しながら学校に通っています。入学当初、編入生ということで目標があってこの大学に来たのですが、２年次編入ということで、他学生との輪の中に入るのが不安だった時期もあり、目標を失いかけていた時期もありました。しかし、サークル活動や基礎ゼミ、人間総合科学演習のゼミなどを通して他学科の人とも友達を作ることができて、今は楽しく充実した大学生活を送っています。

現在、私は１年と２年の授業の両方をとっていて、時間的には大変忙しいのですが、専門科目の授業は将来、社会福祉士になりたい私にとって、とても実になる授業です。また専門科目の他に、英語の授業がありとても楽しく授業に参加しています。

私は、自分のやりたいことができる環境に恵まれていて、最高に幸せ者だと思っています。世の中には、学びたいのに学ぶことができない人がたくさんいると思います。私はこの貴重な大学生活を有意義に過ごしていきたいし、そして、期待を裏切らないようにこれからも、日々努力して頑張っていきたいと思っています。

知識・経験のなさを強みに

大学院：
博士前期課程１年
木村　茉由

２年前、ここ青森県立保健大学へ編入学したときは、まさか自分が大学院へ進学するとは思ってもいませんでした。もうすぐ、入学して約４ヶ月が経とうとしています。

進学するに当たり、全く臨床経験がないということが私はとても不安でした。院生として研究をするに当たって、おそらく知識・経験不足というものが大きな壁になるだろうと感じていたのです。しかし入学後、「知識がない、経験がないこと。これは強み。」と言って下さった先輩がいました。私はとても励まされ、勇気付けられました。知識や経験が豊富で、考え方もそれぞれ異なる院生との討論などにおいて、無力感を感じることも多々あると思います。しかし、「分からないからここにいるんだ」と思うことで、２年間を乗り切ることが出来るのではないかと思っています。もちろん自分でも調べ、努力しながら、『知識・経験のなさを強み』として、これからの２年間を頑張りたいと思っています。そして、院生生活がさらに充実したものになるよう、自らチャンスを見つけ、主体的・積極的に活動するとともに、様々な研修や学会に参加し、学問に真摯に取り組んでいけるように頑張りたいと思います。

看護の質に貢献できる研究成果をめざして

大学院：
博士後期課程１年
休波　茂子

この４月から、大学院博士後期課程で学ぶことになり、12年ぶりに学生になりました。専攻は、看護学分野、看護マネジメント学領域で、「感染管理に関する研究」を行いたいと考えています。施設に入院してくる多くの利用者は、感染というリスクを抱えていますが、その上、病院などの施設の環境や病気を治すための治療行為そのものが感染のリスクを包含しています。そこで、利用者を感染のリスクから守るための手段や方策について検討し、少しでも医療および看護の質に貢献できるような研究がしたいと考えています。また、今まで積み重ねてきとことを、どれだけ研究成果として完成させることができるのか、自分に対しての新たな挑戦の機会だとも考えています。授業は始まったばかりですが、これまでの経験によって積み重ねてきた知識の確認だけではなく、新たな学びや発見があります。しかし、これから始まろうしている研究の過程は、決して楽なものでなく、たぶん辛く、苦しいことの方が多いように思いますが、先生方や大学院生の皆さんから刺激を受けながら、研究者として、看護の専門職として、成長していけたらと思います。

北海道のオホーツク地区から通うことになりますが、体力、知識、意志力をもって、がんばりたいと思っています。

新入生の皆さんへ

看護学科４年
齊藤　真由美

新入生の皆さんは大学へ入学して数ヶ月経ちましたが、大学生活にはもう慣れたでしょうか？

私は四年生になりましたが、新入生の皆さんへのメッセージとして、是非伝えたいことが二つあります。一つ目は四年生になるのはあっという間だということです。人によって感じ方が違うこともあると思いますが、私の友達もそう言っています。三年生になると実習で忙しくなります。勉強ももちろんですが、アルバイトやサークル活動、友達と遊ぶ…などなど色々なことをやってみるといいと思います。

あともう一つは、夏休み、春休みなどの長期休暇を有意義に過ごすということです。大学生ならではの長期休暇を利用して色々チャレンジしてみるといいと思います。少しテストとかぶるかもしれませんが、ねぶたには是非参加してみるといいと思います。

これからの大学生活でレポート、実習…など困ったりすることもあると思いますが、一つ一つ解決していくことで自分の成長につながると思います。友達を大切にして助け合いながら大学生活を豊かなものにして下さい。

初夏に感じること

理学療法学科３年
工藤　瑠里子

新入生のみなさん、御入学おめでとうございます。受験勉強の疲れも癒え、大学生活を楽しんでいることと思います。一方、合格によって当面の目標は達成され、何となく日々を過ごしている時期ではないでしょうか。ここで、私が大学生活で感じている事をクイズ形式で皆さんにお伝えしたいと思います。

まずはあるようでないもの。それは時間です。大学在学中の時間は限りあるものです。また、使い方如何で大学生活の質が変わってきます。是非、有意義となるように、常に向上心を持って、勉・遊・寝に一生懸命になって下さい。

次に当たり前であって当たり前でないもの。それはあなたの常識です。これから多くの人と出会いに恵まれる一方、一人の大人として扱われます。つまり、勉強はもちろん、サークルやアルバイトなど様々な事にチャレンジし、自らの内面を磨く努力を惜しまないでください。

最後に何者にも代え難いもの。それは友人です。友人は同じ目標を持つよき理解者であり、ライバルです。互いに切磋琢磨し、成長してください。

私自身もこの事を忘れず残りの大学生活を過ごしたいと思っています。

新入生の皆さんへ

社会福祉学科２年
尾崎　舞

新入生の皆さん、入学してから数ヶ月が経ちましたが、大学生活はいかがでしょうか？慣れてきた面もあると思いますが、まだ不安な面も多々あると思います。

私は、皆さんに伝えたいことが二つあります。一つは、時間を有効に使うことです。何となくボーっとしてるとあっという間に時間は過ぎてしまいます。講義の空き時間を活用して勉強することでも良いし、またサークル活動やアルバイトをすることも良いと思います。時間を有効に活用し、充実した大学生活になるようにしましょう。

もう一つは、遊べるときにたくさん遊ぶことです。テストやレポートに追われていると、自由な時間がなかなか見つからなくなります。だから、余裕のある今のうちに友達とたくさん遊びましょう！！夜中まで遊ぶことが続いて寝不足になっても、意外と元気で過ごせますよ。ただ、本当に体調を崩してしまってはいけないので、体調管理だけはしっかりとしたほうが良いです。

限られた時間の中で、自分を最大限に発揮でき、「大学生活楽しかった！」と思えるように、日々充実した生活を共に送っていきましょう。

これからの大学生活に向けて

編入学生：
看護学科４年
佐藤　歩維

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。新入生が入り、私も入学した頃を思い出しました。そして、あっという間に卒業へと向かっていると、改めて実感してます。大学生活というのは、今まで皆さんが経験してきた学生生活のなかで、一番時間が早く過ぎると思います。確かに、大学の講義の時間は高校のように朝から授業があり続けるわけでなく、空き時間もたくさんあります。しかし、それは学ぶ事が少ないという意味ではありません。大学というのは、社会に飛び出す一歩手前です。これからの四年間、将来のことについてたくさん考えると思います。一歩立ち止まって考えたり、振り返ったり、迷ったりと一本道ではないと思います。しかし、時間はあります。たくさん迷ってください。そして、個人がすべきことがたくさん見つかると思います。そんな時は、思い切って挑戦してください。私は今になって挑戦しなかったことに後悔することがたくさんあります。今しか出来ないことがたくさんあります。様々な物事や、色んな人々から多くの事を学んでください。それは、みなさんを素敵にしてくれますよ。

大学院生活は…

大学院：
博士前期課程２年
萬谷　暁春

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。入学から数ヶ月が経ちましたが、どのような学生生活を送っていますか。

私は、看護師として臨床での実践と並行しながら、大学院で看護マネジメントを学んでいます。大学院では、知識を基礎として、そこから発展・応用した自分の考えが要求されます。私は、自分の未熟さを感じつつも、年齢や経験など様々な背景を持った方々と共に学習し、自分とは違う看護の考え方に触れ、日々学ぶことが多い学生生活を送っています。

大学院で学習する中で、私が皆さんに言えることは、時間の使い方が大切だということです。私自身、時間をうまく活用できてはいませんが、時間をどのように使うかによって、課題への取り組み方に違いがあると思います。時間に追われながらやった課題は、納得のいくものにはなかなかできません。計画性を持った時間の使い方をしてみてください。また、自分が大学院で何を学びたいのか、何をしたいのか、という意識を持って学習に取り組むことが大切だと思います。この２年間は、看護について、今まで以上に深く考えることのできる期間だと思います。自分の大学院での目標が達成できるように頑張ってください。

「志」を持つこと

大学院：
博士後期課程２年
駒田　亜衣

大学院新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

私が昨年の３月に京都の大学院で修士課程を終え、４月から保健大学で博士後期課程に進むと決めた時、当時の恩師が私にこのような言葉を送ってくれました。

「其の道に入らんと思ふ心こそ我が身ながらの師匠なりけれ」

これは利休百首の中の一首で、何事でもその道に入りそれを学ぶにはまず志を立てなければいけないが、自発的に習ってみようという気持ちがあれば、その人自身の心の中にもうすでに立派な師匠ができているという意味です。茶道のみならず、どんな専門分野であっても「志」を持った時点で、その道への一歩を踏み出しているのだからこれからも頑張りなさいとその恩師から激励をもらいました。

私が教わってきたこれまでの恩師は、直接学ぶことがなくなった今でもずっと指導してくれ、相談にのってくれ、見守ってくれています。一緒に学び、仕事をしてきた仲間もそれは同じで、その時の悩み事や問題も乗り越えてくることが出来ました。そのことが私自身の中の「志」へとつながり、これまで成長することができたのだと感じます。今年度入学されました皆様も、学ぶ分野は違っても、同様に「志」をもって専門の道に入られたのだと思います。

10年経って残っていることが、その人が今そこで学んだことだと言いますが、10年前を振り返ってみると、まさに今の自分と切っても切り離すことができない出会いや学びがありました。当時は10年後の自分がこのような道を歩んでいるということを想像もしていませんでしたが、そのことを考えると、この先の10年後も現在学んでいることや、新しい人との出会いがやはり残っているのだろうと思います。

この貴重な大学院での生活が、10年後、20年後に残る出会いや学び、研究につながるはずです。私自身も、この大学でご指導いただける先生方や、相談にのってくれる同期に教わりながら今後も学んでいきたいと思っています。

新入生学内研修

新入生学内研修委員長　理学療法学科助教授　川口　徹

新入生合宿研修が、青森市の宿泊施設を利用できなくなったことから、今年度から合宿研修を弘前市で行い、いままで合宿研修で行われていたプログラムの一部を学内で行うことになりました。したがって、実行部隊である教員サイドでは、若干のとまどいを持ちながら、どのようにしたらよりよい研修にできるかどうかを模索し、なんとか実施することができ、ほっと胸をなで下ろしています。

日程の都合もあり、教務学生課からのガイダンスや人間総合科学演習の説明などと同日のスケジュールになってしまい、過密なスケジュールではありましたが、新入生は慣れない環境にありながら一生懸命研修を受けていました。

新入生学内研修の内容は、全体オリエンテーションの後、イングリッシュ・プレゼンテーション、警察官によるサイバー犯罪やマルチ商法への対応講座、学生による禁煙教室、料理教室の案内およびサークル紹介が行われた後、学科別オリエンテーションが行われました。イングリッシュ・プレゼンテーションでは、ネイティブ教員によるユーモアたっぷりなやりとりがあり、警察官によるサイバー犯罪などへの対応講座はとても実践的であり、学生による禁煙教室はとても親しみやすいものでした。それぞれ笑いあり、サプライズありのざっくばらんなもので、過密なスケジュールの中でのホッとしたひとときだったようにも思います。

新入生が、不慣れな大学生活に早くとけ込み、速やかに勉学に打ち込むための支援になればと思っています。

真剣な表情で研修にのぞむ新入生

新入生合宿研修を終えて

新入生合宿研修委員長　理学療法学科３年　長谷部　香織

今年は学生が主体的に企画・運営を行う初めての新入生合宿研修となりました。例年とは場所等の変更もあり、戸惑いも多い中でのスタートでした。今までの合宿研修の蓄積・評価だけでなく学生主体ということで、今まで新入生として合宿に参加した上での反省点・工夫も考慮しつつ準備を進めていきました。入学してまもない新入生にとって、まだ大学の右も左もわからぬままの合宿研修だったかと思いますが、その中でも新しい友人との出会いや上級生・教員との関わりなど、たくさんの人との交流を通して今後の大学生活が有意義なものになる手助けにと準備を進めていきました。準備に差し当たり、多くの教職員・在校生の協力もあり、学生主体として合宿を迎えることができました。

司会進行をつとめる実行委員

＜合宿研修１日目/4月14日㈮＞

合宿研修１日目は夕食前の簡単なレクリエーションと在校生との交流が中心となりました。自己紹介を兼ねた名前ビンゴ、フルーツバスケットなどを通し、新入生同士の交流を深めてもらおうとレクリエーションを行いました。はじめ緊張していた表情もレクリエーションを通して軟らかい表情へと代わっていき、合宿研修の始まりとしてはよかったのではないかと思います。

夜には在校生との交流ということで、看護学科・社会福祉学科・理学療法学科にわかれたプログラムを組み、学科毎で上級生と新入生の交流の機会を設けました。学科によって、内容に差はあるものの、学校生活に対する不安や疑問を解決する

良い機会になったのではないかと思います。

プログラム以外の部分でも食事・夜・お風呂など、新しい友人と過ごし語り合う機会を楽しんだ新入生も多く、大学生活のはじめの思い出を刻めたのではないでしょうか。

名前ビンゴで自己紹介をする新入生

＜２日目/4月15日㈯＞

２日目は体育館を使用した交流会を行いました。この交流会では、新入生は学科関係なくチームが組まれ学科の壁を越えて、協力しながら運動することができました。競技が始まる前に行われたラジオ体操は、在校生によって工夫されたユーモア溢れるものであり、新入生、在校生ともに楽しみながら準備運動をすることができました。

はじめに行われた障害物リレーは、スタート地点でバットを軸に回転し、走るというものでした。代表走者はふらふらになりながらも懸命にバトンをつなごうとし、その姿をみたチームメンバーからは自然と声援があがり、チーム一丸となって楽しむことが出来たように思えました。

次に、毎年恒例の長縄跳びが行われました。新入生は掛け声をかけたり、作戦を練りながら懸命に挑戦していました。１度跳び続けるとコツをつかむのかどんどん記録を伸ばすチーム、止まってしまっても向上心をもって一生懸命チャレンジし続けるチームなどさまざまでしたが、どのチームも短い時間内で頑張る姿が見受けられました。

また、トーナメント方式のドッヂボール大会も行われました。ボールを必死に追いかける人、うまくパス回しをし、次々攻撃する人、当たらないように必死に逃げる人などさまざまでしたが、どの人も真剣にドッヂボールを楽しんでいました。

時間の都合で、物足りなさが残る場面もありましたが、新入生、在校生ともに盛り上がることができる交流会でした。

親交を深める様子

＜全体を通して＞

「大学生活に慣れてほしい」・「楽しい合宿になるように」・「有意義な思い出に」と実行委員会として準備してきて、完璧にとはいかない部分も多々あったかもしれませんが、新入生にとって何らかの形での思い出として残るものできたのではないかと思います。新入生同士が楽しそうに笑いあい、語り合い、仲良くなっている姿をみると、上級生として、自分達の入学時の様子が思い出されるとともに、このような機会に関わることができて本当によかったと思います。もっといろんなことができたのではないかと反省もありますが、今後に向けてこの経験を引き継げればと考えています。来年以降、このような合宿研修という形が継続されるかはわかりませんが、上級生として不安と期待を込め入学してくる新入生に何かを残してあげれればよいのではないかと願うばかりです。

新入生と上級生の交流

I LOVE AUSTRALIA

看護学科３年 児玉　裕美

現地の友と Japanese Food Party

私は三週間オーストラリアに海外研修に行って来ました。三週間は毎日が驚きの連続でした。日本では有り得ないことがオーストラリアでは毎日起こります。当たり前ですが、現地では英語しか通じません。最初、初めての海外で、さらに英語が話せない私は、電車に乗ることさえ不安で仕方がありませんでした。

そんな私を支えてくれたのは、ホストファミリーを始めとする現地の人々でした。彼らは本当に寛大で、想像以上にポジティブでした。オーストラリアでは、日本とはまた違う「人の温かさ」に触れる事が出来ました。また、いろいろな人々と接していく中で「人との出会い」の大切さを知りました。そのとき、その瞬間、その場にいなければ人との出会いはありません。日本にいるときは感じることが出来なかった「人との出会い」の素晴らしさを実感することが出来ました。さらに、オーストラリアに行き、自分の中での一番の変化はポジティブ思考になったことです。「Nothing is impossible」の精神が身につき、やって出来ないことはないと思うようになれました。

オーストラリアでの海外研修の学びは本当に沢山あります。文章なんかでは伝えることは出来ません。少しでも興味のある方はぜひ行ってみて下さい。本当に楽しいですし、絶対に後悔しません。考え方変わります！保証します。

Let's go to the Australia！

日本とオーストラリア

理学療法学科２年 戸塚　あおい

オーストラリアでの３週間は、毎日が新鮮で、日本では学ぶことのできない多くのものを学ぶことができました。大学では、英語や文化や医療を学びました。また、いろいろな世代の人と話をする機会もありました。校外見学や週末のツアーでは、病院や市街に行ったり、動物や自然に触れたりしました。周りの景色も、聞こえてくる言葉も、見るもの感じるものが日本とは違い、驚きの連続でした。

その中でも、この海外研修で一番印象に残ったのが、オーストラリアの医療でした。オーストラリアの医療は日本の医療よりも進んでいて、とても驚きました。特に、緩和ケアや在宅ケアが日本よりも普及しています。日本の医療の遅れを感じるとともに、オーストラリアの医療は日本に比べて患者さんや医療者に優しいと思いました。他の国の医療を知り、日本の医療を考え直すことができて、良い機会だったと思います。

今回の海外授業で、日本の良くない面を知りました。しかし同時に、日本の良さもたくさん知ることができました。この３週間で学んだことは、とても貴重なものでありこれからの生活に活かしていきたいと思います。日本人として生まれた私たちは、日本の良くない面ばかりに目を向けるのではなく、日本の良い部分を守り伝えていくことが大切だと学びました。

Fukushima 先生宅でのバーベキュー

米国ベレノバ大学看護学生交流

国際科長 リボウィッツ志村よし子

[ベレノバ大学との締結式]

平成18年３月21日、ベレノバ大学において青森県立保健大学看護学科とベレノバ大学看護学部との国際交流締結の式典が開かれた。フィッツパトリック看護学部長を始めベレノバ看護学部教員、日本語担当科目教員、留学生、本学から、新道学長、リボウィッツ国際科長が出席し、約100名の関係者が集う盛大な式典であった。

スピーチの中でフィッツパトリック氏は、「ベレノバ大学は、ヨーロッパ諸国、アジア諸国に学生を送っているが、国際交流の締結をかわしたのは、青森県立保健大学のみである。両大学との交流のきっかけは、個人レベルでのフレンドシップから始まり、個人のネットワーキングが国際交流にまで導いた」とネットワーキングの大切さを語られた。レセプションでは、日本語に堪能な神父様の出席や生け花があちらこちらに生けられた心のこもった暖かい雰囲気であった。昨年本校で研修した学生が仕事場から会いにきてくださったり、5月に研修する学生10人とも親交を深めることができた。学生・教職員の交流さらに共同研究と交流の場を拡大してゆくことを期待したい。

締結式

ベレノバ大学にて

[第2回ベレノバ大学看護研修生の青森県立保健大学(AUHW)訪問]

AUHW　Volunteer　Students Gave a Superb Party for the Visiting Villanova Students!

10人の看護学生(男子学生１人)と２人の教員を含める計12人の一行が来校した。昨年と異なり晴天に恵まれ、空気の澄んだ最高の季節であった。本学での研修は、「国際看護比較論」選択３単位の一環である。授業や見学、体験及び米国学生によるプレゼンや、引率教員による講義が主であるが、一番良かった経験はという問いに、「ホスト側のすばらしさ」と多くが答え、「プログラムは、非常に興味深く講義内容も素晴らしかった」と述べていた。なかでも「学生のウエルカムパーティーは、言葉に尽くせないほど私たちへの歓迎を感じとり感動した」という反応が多かった。改善すべき点としては、訪問側が、「もっと日本語を学んでくるべきだった」「日本の学生とより多くの時間が過ごしたかった」「日本の学生のプレゼンも聞きたかった」などである。限られた時間の中で、英語クラスへの参加や「人間発達援助論」のクラスでの意見交換、学生からの手作り料理の差し入れ、カラオケ、など数々の人と人とのふれあいがあった。早朝６時の出発にもかかわらず多くの学生が見送ってくれた。お忙しい中、惜しみなく多くの時間を割きご協力くださった学生・教職員の皆様に心から感謝いたします。

ウェルカムパーティ（本学にて）

政策研究から学んだこと

「障がい者の学習環境を考える学生の会・社会福祉学科4年」
五十嵐香、今井敏、北山賢治、鳴海奈津美、蛭田良一

平成17年の５月、ゼミの担当教員である増山助教授が、私たちに一枚のパンフレットを見せた。そのパンフレットは、青森県の発展に寄与する自由な発想に満ちた政策を募集するイベント「あおもり県民政策ネットワーク」の案内であった。このイベントに参加するかどうかゼミで話しあいを行った。結局、ゼミ生の半数以上が知的障がい者を対象としたオープンカレッジに参加していることから【障がい者の生涯学習の保障に関する政策研究～知的障がい者の学習環境構築を基にして～】というテーマで『障がい者の学習環境を考える学生の会』という研究チームを発足、応募した結果、幸いにも採択となった。

しかし、政策の提言というプロセス自体を知らない私たちは、その直後から右往左往することとなった。まず本研究のキーワードとなるものを全員で探り合った。出てきたキーワードを軸に、あおもり県民政策ネットワーク事務局の方その他、多くの方からのアドバイスを受けながら、政策提言への素案をつくっていった。まさにプロセスの一つひとつが試行錯誤であった。

今回の研究過程であるアンケート調査の集約時に、ある場面と遭遇した。客観的な数値データは政策提言においても重要な要素となると思い、それらを量的データとして本研究に利用するつもりであった。

ところが、知的障がい者の家族から「(生涯学習機会に関する) 制度や社会自体が既に差別的である。あるいはこのアンケートそのものが既に差別であり、屈辱的である」と指摘された。障がい者を「支援したい」(援助したい) という思いそのものが偏見につながるということに気づかされたのである。同時に私たち自身が、障がい者福祉をめぐって葛藤することになった。

私たちは政策研究を行うことで社会に存在する偏見に向き合おうとしていた。しかし、私たち自身の中にある偏見を発見し理解するというプロセスから、障がい者への支援の態度を根本から考え直す必要を感じた。健常者・障がい者の関係性や支援のあり方の見直しといったことが研究の軸となっていった。

12月からは２月の締切りへ向かって報告書の執筆活動に入った。これも順風満帆とはいえない状況が続いた。同じ目標を持っているとはいえ、五人の人間が感じているそれぞれの価値観を調整するという作業は、報告書を執筆する上での課題となった。お互いの認識の差を埋め、共通理解をしていくことの困難を味わったが、結果として五人の一致した見解に基づく提言をすることができた。

さて、その提言はどうなったかというと、私たちは障がい者への学習環境構築に向けた提言として、①継続的な開催と開催頻度の増大、②生涯学習の広報活動・情報提供の強化、③受け入れ体制事前情報提供機関の設置、④ルビつき資料の採用、⑤「障害」から「障がい」へ、⑥社会教育センターの機能追加の６つを挙げ、最終報告とした。

当初は、障害のある人のために、私たちのできる精一杯のことをやってみようと思っただけであった。障がい者やその家族から多くのことを学ぶこととなった。最後に、ご協力いただいたすべての方々へこの紙面をお借りして、御礼を申し上げたい。

全員でアンケートを集計しているところ

学生自治会紹介

自治会長 長谷部　香織

学生選挙によって選出された自治会役員９名と４月に入り選出された各種委員長３名によって学生自治会及び本部会は組織されています。ここで本部会役員を紹介したいと思います。まず、自治会副会長は谷川裕美さん（理学療法学科３年）、赤平千佳さん（看護学科３年）、書記は其田真一君（社会福祉学科３年）、尾崎舞さん（社会福祉学科２年）、会計は佐々木将君（社会福祉学科３年）、下山諭史君（理学療法学科２年）、庶務は澤田侑一君（看護学科３年）、小山内鮎美さん（看護学科２年）（以上自治会役員）、選挙管理委員長は森竹絢香さん（社会福祉学科２年）、サークル代表委員長は佐藤健紀君（理学療法学科２年）、大学祭実行委員長は新山珠里さん（理学療法学科３年）です。私を含めた自治会役員・各種委員長、計12名と吉川由希子先生を中心に自治会活動を進めていく予定です。

今年度は今までなかった活動にも積極的に挑戦し、学生総会やＨＰの開設など学生と学校の橋渡しとしての活動の活性化を図るとともに、学生活動を支援し活発化できればと思います。何をやるにも初心者ばかりで手探りのことが多いですが、学生全体の意見を反映しよりよい活動になるよう頑張っていきます。

自治会役員及び各種委員長

サッカーサークル

社会福祉学科３年 須々田　和大

臙脂色のサムライ達

サッカーサークルは選手23人、マネージャー16人によって構成されています。練習は毎週２回です。（水曜＆日曜）平日は授業が終わってからなので練習時間は限られていますが、選手はみな集中して、パス回しやシュート練習、ミニゲームなどに取り組んでいます。去年は最終成績１部リーグ２位、トーナメント三位入賞という戦績を残しています。去年の最終戦ではあと一歩のところで決勝進出を逃しました。そのときは誰しもが涙しました。私たちは、力の限りがんばりました。しかし、まだまだ満足はしていません。今年は１年生も大勢入部し、新たなチームでさらに上の結果を目指しています。そう…優勝です。春夏秋冬ボールを追わない季節は一つもありません。春＆夏には灼熱の太陽のもと肌の色が変わるまで走り回り、秋には太陽が沈み空一面紅く染まるなかでボールを追いかけ汗を流す。もうそこには年の差なんて存在しません…まさに青春ではないでしょうか。

ドイツワールドカップ！？…いやいや、ワールドカップに勝るとも劣らない私たちの満身創痍の試合をぜひ応援に来てください。応援がある限り、どこの場所でもそこは私たちのホームグランドです。私たちは本気です。サークルという枠組の中で精一杯がんばっています。これからも、サッカーサークルを温かく見守ってください。そして御理解の程をよろしくお願いします。

第４期生の就職・進学活動を振り返って

就職対策委員会

平成18年３月、本学第４期生が秘めたる情熱と闘志を抱いて社会に旅立ちました。就職状況は１～３期生同様に非常に高い内定・就職率を達成・維持することができ、県立大学の使命としての地元や地域への人材定着という点においても昨年度より９ポイントほど上昇させることができました。

学生への就職活動サポートは本委員会を中心に全学体制で取り組み、主に次のような支援事業を行いました。

1　県内外の病院・社会福祉施設等に対する就職用パンフレット配布及び求人票の提出依頼
2　学生と事業所人事担当者との直接面談による就職合同説明会の開催
3　模擬面接や小論文添削指導の実施

大学としては本委員会を中心にこれまでの就職対策を十分に検証するとともに、３学科と密に連携を執りながら各学科の特性に配慮したより実効性のある就職対策を打ち出し、第５期生への就職支援を進めていきます。

【第４期生の進路状況】（単位：人、%）

（　）内は、前年実績

学　科	卒業者数	進学者数	就職希望者	就職者［うち県内就職者］	就職率
看護学科	１０６	6	１００	９６　［３４］	９６.０　(98.0)
理学療法学科	２１	1	２０	２０　［9］	１００.０ (100.0)
社会福祉学科	４４	4	４０	３９　［２７］	９７.５ (100.0)
合　計	１７１	１１	１６０	１５５　［５５］	９６.９　(98.7)

看護学科における組織的な就職支援

看護学科助教授　益田　早苗

看護学科の就職支援は、学部の就職対策委員会の委員１名と学科の就職対策支援チーム４名が中心となり、卒業研究の担当教員と連携しながら行なっています。卒業研究の担当教員は学生の最も身近な支援者であり、希望施設の選定や面接指導、履歴書等の記載指導等をしています。近年、新卒看護職員の離職者が１割近いとの報告もあり、希望施設の選定の際に、「自分の目指す看護」、「関心のある領域」、「将来のキャリアプラン」、等の視点から検討するように薦めています。新卒時の就職施設での看護の経験は非常に大きな影響を持っています。そのため、看護師としての成長の礎となる最初の就職施設を大切に考えることが必要です。看護の職場は、最先端の医療技術、慢性疾患や療養型の施設、地域と密着した医療施設、等それぞれに特徴があり、学科教員が学生１人ひとりの個性や希望にそって相談を受け、希望施設の選定を支援しています。

施設への問い合わせや訪問見学、内定辞退等の就職活動では、学生といえども社会人としてのマナーや態度が求められます。特に就職活動では、学生個人というよりは、青森県立保健大学の看板を背負っているのが現状です。そのため、就職活動では、社会人としての自覚を持って望むことが求められており、教員は先輩社会人としてのアドバイスも欠かせません。

本学看護学科卒業生の就職率は、開学時からほぼ100％と安定しています。本学の学生は、他の大学生のように多数の施設の受験が必要な状況ではなく、第1希望と第2希望をあわせ２～３カ所程度で十分であり、希望施設を絞った受験が内定への近道と思われます。

看護学科は県内出身者がおよそ半数を占めていますが、昨年度の県内の就職率は学科全体で35.3％と低い状況です。今年度は診療報酬の改定もあり、県内の看護師採用数の増加が見込まれます。県内の看護職員の不足状況は厳しく、看護学科では県内就職の促進に向けて学生への情報提供や支援を充実させて行きたいと考えています。

理学療法学科の就職対策について

理学療法学科講師 桜木　康広

理学療法学科では、平成17年度3月までに第1～4期生の82名がすでに卒業し、それぞれ理学療法士として全国各地で活躍しています。就職の一条件として、理学療法士の国家資格取得が必須となっている現在、就職活動に加えて国家試験対策も並行して取り組んでいます。本格的には総合臨床実習終了後の４年次７月以降に就職活動を始めますが、市町村等の地方公務員の場合は、各市町村のホームページ等で確認が必要であり、若干早め（5～6月）に活動を始めます。

手順としては、まず、施設見学（アポイントメント後）をしてから、多くの場合は理学療法に関する筆記試験（公務員の場合は一般試験も有）と健康診断、面接試験を受けるという流れになっており、学科としては卒業研究担当教員が、担当学生個別に責任を持って指導に当たっています。その場合、経過と結果については、学科の就職対策委員を窓口として、学科会議を通して学科の教員間で情報交換をしています。また、面接試験の受験にあたって、希望のある学生については、人間総合科学科目の教員に協力を頂いて、個別指導を受ける体制を取っています。

４期生までの経過を振り返ると、卒業研究が終わる年内には、ほぼ全員が就職先を決め、国家試験に向けての学習に取り組んでいます。国家試験対策としては、学生個人やグループでの自主的学習会の支援と定期的に模擬試験（計10回）を行い、全員合格に向けての指導を行っています。最近の国内の理学療法士の就職状況は、養成校の急激な増大（平成18年4月現在196校・入学定員10,267名）と診療報酬の改定に伴って、就職の間口が年々狭まっています。そこで、本学の特色である「地域特性に対応できる人材としての」理学療法士の県内外へのアピールや、既に活躍している卒業生の就職先での採用が継続できるよう、臨床実習施設としての追加登録を推進しており、今後も学科全体で、就職支援を行っていく予定です。

社会福祉学科の4期生の進路状況および就職対策について

社会福祉学科助教授 佐藤　恵子

１．4期生の進路状況について

社会福祉学科では、4期生44名のうち30名が青森県内外の社会福祉関係施設に社会福祉専門職として就職し、8名が一般企業や団体職員および公務員として就職しました。また、3名が大学院や専門学校に進学し、最終的にほぼ全員が希望する進路に進むことができました。ちなみに本学科の1期生から4期生の就職率は95～100％となっています。

２．学科内の就職支援体制について

本学科では、学科内に就職支援委員会を設け、全学の就職対策委員会との連携の下に、学科教員全員が協力して学生に対するきめ細かい就職支援を行っています。具体的には、①3年生および4年生に対する就職ガイダンスの開催 ②公務員志望者に対する自主ゼミによる指導③就職支援委員及び卒業研究指導教員による就職に関する個別相談、情報提供　などです。

３．学生の進路希望および就職活動の状況

進路希望については、就職希望者が多くなかでも社会福祉専門職を希望する者が多数を占めています。公務員志望者も毎年数名いますが、試験のハードルが高く現在のところ合格率は高くありません。

希望する就職地としては、全体的に出身地（地元）での就職希望者が多い傾向がみられます。本学科では青森県出身者が多いことから県内就職を希望する学生が多数を占めています。

就職活動については、希望する分野・職種等によって個人差がありますが、社会福祉関係施設からの求人は、一般企業に比べて時期が遅くしかも不定期に出される場合が多いため、長期にわたって粘り強く取組むことが要求されます。学生にとっては、卒業研究や科目履修、国家試験の準備等と重なり負担が大きいのですが、強い意志を持って積極的かつ計画的に取組んでいくことが、目標達成の鍵を握っているといえます。

学生にとって就職は、将来自立して生きていく基盤を築くための重要な第一歩です。保護者の皆様には、本人とよく話し合い、広い視野と長期的な展望を持って取組むことができるよう、暖かく見守り励ましていただくようお願いします。

卒業証書学位記授与式について

教務学生課主査 鹿内　亮一

残雪が残りつつも好天に恵まれた平成18年３月15日、学部第四期生の卒業式及び大学院第２回目の修了式が執り行われ、看護学科106名、理学療法学科21名、社会福祉学科44名に対し卒業証書及び学位記が、大学院修了生２２名に対し学位記が、新道学長から手渡されました。

「本学で学んだ知識や技術を活かしつつも、経験を重ねることにより専門職者として成長して欲しい」との学長からの式辞に続き、知事代理として長谷川出納長から、「本学で培った自信と誇りを持って、本県、日本の明るい未来を切り拓く大きな原動力となって欲しい。」との言葉が贈られました。他、ご指導、ご支援を頂いている各団体や代表者からもたくさんのお祝いの言葉が寄せられました。

学部在校生を代表し理学療法学科３年今美香さんから、また大学院生を代表し看護学分野成田真澄さんから送辞が述べられ、これに対し、看護学科五十嵐加奈子さん、また大学院理学療法学分野矢吹勇太さんから答辞が述べられました。

式典、記念撮影終了後も、恩師、仲間との歓談に花を咲かせ、各々が別れを惜しみつつ、母校を後にしました。

卒業後の第一歩は皆異なりつつも、保健大学在学中に学んだことを糧に、社会においてさらにたくましく成長していくことを、先生方及び関係者は願っています。

卒業証書学位記授与式

卒業証書学位記授与式

卒業記念パーティについて

卒業関連事業実行委員（看護学科４年）柏倉　大作

第４回卒業記念パーティーは平成18年3月15日に青森国際ホテルで開催されました。当日は決して良い天気とは言えず、空は曇っていましたが、ホテルのパーティー会場は諸先生方から頂いたたくさんの花に彩られ、会場内は卒業記念パーティーにふさわしい雰囲気だったと思います。

この卒業記念パーティーは卒業関連事業実行委員会として４年生（第４期卒業生）が中心となって、企画・運営されました。本来ならば、私たち在校生が中心となり、企画・運営できれば良かったのですが、結局先輩方に引っ張られる形になってしまい、大変申し訳なく思っています。卒業研究や国家試験などで一番忙しいはずの４年生がホテルとの打ち合わせなどをこなしていくのを見て、先輩方はもう「学生」ではなく「社会人」として歩み始めているのだと感じました。

パーティー会場では卒業生と先生方が思い出話に花を咲かせていました。卒業生が苦楽を共にしてきた先生方と涙を流しながら話す姿がとても印象的でした。卒業生からは学科ごとに先生方へ歌を歌うなど様々な形でメッセージが送られ、感謝の気持ちを思い切り表現していました。理学療法学科の発表ではメッセージに答えて先生方が舞台上へ上がり、卒業生と抱き合うことなどもあり、記念パーティーは大盛況でした。

卒業記念パーティ

卒業記念パーティでの卒業生を見ていると大学での４年間が本当に充実したものであったと感じました。
それは卒業生が流した涙と笑顔が裏付けているのでないでしょうか。その涙と笑顔は専門職として社会に貢献していくことの裏付けでもあるのだと思います。

「貴重な最後の学生時代」

若山　美奈子
（看護学科H18年3月卒業生）

大学を卒業し、私は現在、弘前市で看護師として働いています。実際の職場はわからないことばかりで戸惑いも多くありますが、病棟の先輩方からの丁寧な指導を受け、新しい学びや経験が日に日に増えていくことに喜びも感じています。

社会人となった今大学生活を振り返ってみると、今までで自由に使える時間が一番多く、沢山のことを経験できる４年間であったと思います。勉強はもちろん、サークル活動、アルバイトなどを通して新しいことをたくさん勉強したり経験でき、このような経験や出会いすべてが自分を成長させてくれたと思います。

また、大学では沢山の人との出会いがありました。特に同じ看護師を目指す仲間から教わることはとても多かったと思います。記録に追われた実習、初めてで大変だった卒業研究、毎日問題を解き続けた国試勉強など、そんなとき同じ悩みを共有し励ましあえる仲間の存在はとても大きいものでした。学生時代の仲間は卒業し働き出した今でも支え合える貴重な存在です。中身の濃い４年間を過ごし、沢山のものを得て卒業させてくれた保健大学にはとても感謝しています。

「４年間を振り返って」

中村　明子
（理学療法学科H18年3月卒業生）

大学を卒業して早いものでもう３ヶ月が経ちました。現在、知識・知恵不足を痛感しながら、がむしゃらに働く毎日です。

４年間の大学生活を振り返ってみると、もっと大学を有効に使い勉強しておけばよかったという後悔の気持ちが大きいです。確かに、臨床に出てからの方がより実践的な知識・知恵を得ることが出来ます。しかし、基礎がなくては話になりません。分からない所・疑問に思ったところをそのままにしないで知識豊富なさまざまな分野のエキスパートの先生方を上手く活用して下さい。

大学生活の中で授業・テスト・レポートで苦しんだ思い出よりも友達との飲み会、キャンプ、大学祭などの楽しい思い出の方が印象に深く残っています。また、大学生だからこそある自由な時間を使ってのアルバイトや趣味活動も今ではいい経験になったと思います。就職してしまうと自由な時間はなく、やりたいことがあってもできないことが多いです。今のうちに新しいことに挑戦したり、やりたいことを思う存分やり、視野を広げてください。

「大学生活で学んだこと」

阿倍　真奈美
（社会福祉学科H18年3月卒業生）

大学を卒業し就職した今、大学生活を振り返ってみると本当にあっという間の４年間でした。初めての一人暮らし、知り合いのいない土地で４年間も生活できるのか？と不安でいっぱいだったのが嘘のようです。

この大学には社会福祉を学ぶために入学しました。入学当初は全くわからなかった専門用語も４年間で自然に覚えていました。必要なのか？と思っていた講義も今思うと役に立つことが多々あるように感じています。

また、多くの人たちと出会えたことも勉強と同じくらい貴重な財産となっています。専門知識を学ぶ大学だからこそできた同じ目標を持つ仲間、サークルや三学科合同の講義を通じてできた友人がいたからこそ思い出に残る大学生活を送ることが出来たと思います。

大学生活というのは一番自由で多くを学べる時期だと思います。目標を持ち夢に向かい勉強することはもちろんですが、出会いを大切にし、多くの友人を作り思いきり遊ぶことも非常に大切です。皆さんも後悔しないようたくさん学び、そして遊んで思い出深い貴重な4年間にしてください。

学部教育の基盤としての教養リテラシーの育成

人間総合科学科目主任教授 藤田　修三
人間総合科学科目講師 浅田　豊

変革の時代といわれる今日、保健医療福祉系の学部学生には、人々の健康と生活の質の向上を目指して専門的知識・技術を駆使し、多職種間連携によって種々の問題を解決し、専門性をさらに発展させる上での潜在能力を高めるような「教養リテラシー」の涵養が求められています。このような背景・学習ニーズに基づき、本学では平成11年度の開学時より、教育理念の一つであるセルフ・ダイレクテッド・ラーニング（ＳＤＬ：自己開発型学習）能力の育成を目指し、1年次前期に「人間総合科学演習」(必修科目、60時間)」を開設しています。

同演習は、学部での学習活動に不可欠な論理的思考や問題発見・解決能力等を習得するために、小グループ学習等を行なうことを通じて、思考能力・表現能力・応用能力といった大学が求める教養リテラシーを育成するための全学的な取組として、継続的にすすめてきました（図１）。いま8年目を迎えています。授業は具体的には、オリエンテーションに始まり、演習学生相互の自己紹介を経て、学習の基本となる情報処理スキル（word, excel, power point等）を身に付けていきます。その後、グループワーク・学習成果発表を主体としつつ、各演習の主題や領域に基づいて、ディベートや実験、実習、調査、フィールドワーク、ワークショップなどの学習を発展的に取り入れる演習が多くあります。その際、担当教員はいわゆる教え込む役割でなく、学生の活動を側面から支えるファシリテーターの役割に徹しています。そういった過程の中で、学生は自分の研究したい、関心のあるテーマを発見し、セメスターの中で論文という形にまとめ、それを編纂・発行したものが「ゼミ論集」になります(写真１)。

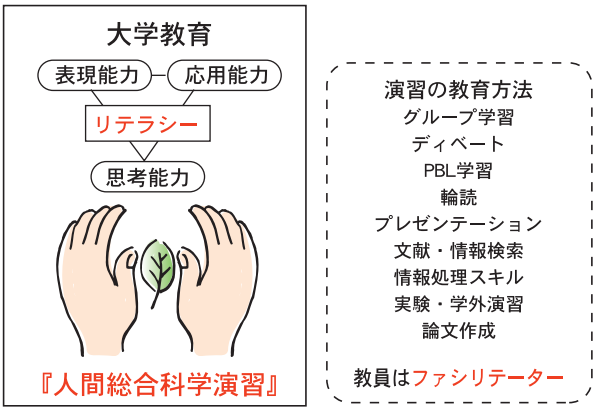

図1 人間総合科学演習の位置づけ

写真1

同演習の効果を、実際に授業を受けた学生たちは、はたしてどのように評価し、またその後の学習・研究活動の中でどう生かしているのだろうかと考え、３学科の３年生及び４年生の学生を対象に、演習の評価に関するアンケート調査を実施しました。その主な結果を振り返りますと、「演習での学びは、自分の調べたことを人前で発表することの手助けになりましたか」という問いに対して、「なった」、「ややなった」と考える学生が、3年生では52％、４年生では44％おり、履修後２～３年を経過しても、演習の有効性が保持されていることが分かりました(図２)。

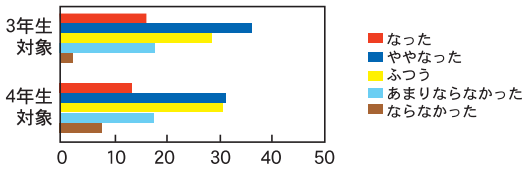

図2 学生評価（人前での発表への手助け）

また、「演習での学びは、専門の授業や実習時のレポート作成に参考になりましたか」という問いに対して、「なった」、「ややなった」と考える学生が、３年生では66％、４年生では56％おり、上級学年に進級しても課題の作成等に十分対応できる基礎的な力を、演習を通して培ったことが伺えました(図３)。

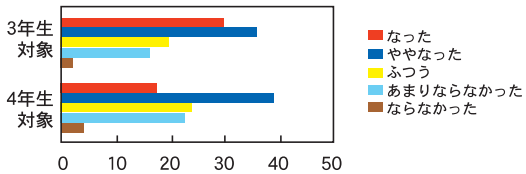

図3 学生評価（レポート作成への手助け）

さらに、「演習の履修は、現在までの学習活動の動機を高めるものでしたか」という問いに対して、「非常に高めた」、「やや高めた」と考える学生が、３年生では49％、４年生では48％おり、演習終了後も高い学習動機が維持され、ＳＤＬができる学生の育成に、同演習が寄与していることが推察できました(図４)。

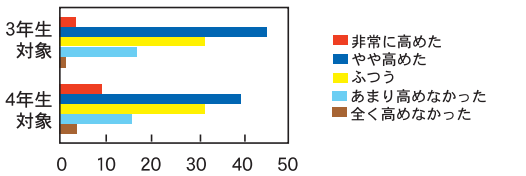

図4 学生評価（将来の学習への手助け）

今後は、演習の学習効果を一層高めるために、指導上のポイント等を示した「教員用ガイドライン」、自学・自習書として活用可能な「学生用ガイドブック」や演習室の整備、評価システムの開発等を計画しています。

つゆき号の寄贈について

平成17年3月で本学を定年退任された社会福祉学科露木敏子教授より本学の教育研究に役立ててほしいと寄付をいただきました。本学では学生の実習等に役立てることができるように10人乗りの自動車を購入し、平成18年2月14日に露木先生をお招きしてお披露目会を行いました。自動車は「つゆき号」と命名され、当日の式典の後、学生を乗せて下北地域での実習に向かいました。

つゆき号

後列右から7番目が露木先生

金曜料理教室の紹介

人間総合科学科目助手 **森永　八江**

充実した学生生活を送るためには、健康であることが重要です。健康への第一歩は栄養のバランスの取れた食事にあります。将来、医療・福祉の現場で働くことになる学生の皆さんは、自身の健康管理も大切になります。学生の皆さん、自炊できていますか？外食、出来合いの弁当、インスタント食品に頼っていませんか？

調理にはげむ学生の様子

試食風景

一昨年度、料理を自己健康管理に役立ててもらおうと開催した料理教室を今年度も開催できることになりました。講師は管理栄養士で健康科学研究センターの駒田亜衣助手と同じく管理栄養士で人間総合科学科目の助手の森永八江が務めています。入学して自炊を始める新入生が多いことから、食事作りに困ることがないよう一人暮しに役立つメニューを用意しました。５月26日から６月23日までの毎週金曜日の夕方に５回シリーズで実施し、学部生、大学院生だけでなく教職員の参加もありました。第１回目は「電子レンジでスピード和食～食事バランスガイドの活用～」と題し、厚生労働省・農林水産省が食事の望ましい組合せやおおよその量をイラストで示した「食事バランスガイド」の活用を紹介した後に、洗米や炊飯、包丁の使い方を説明し、電子レンジで作る肉じゃが・サバの味噌煮・小松菜のお浸しを作りました。第２回目は「ストックメニュー～冷凍庫の活用～」と題し、お好み焼き・きんぴらごぼう・かぼちゃの煮物を作り、冷凍の仕方、冷凍保存に適した食品・料理、冷凍すると食感の変わるものを学びました。第３回目は「ワンディッシュで片付け簡単」とし、親子丼・切り干し大根の炒め煮などを、第４回目は休日に友達と料理できるように、牛肉寿司・生春巻き・チョコパイなどを、第５回目は缶詰や乾物を使ったメニューとしました。基本的な調理技術を習得することができた、これなら家でも作れると、好評でした。試食の際に、新入生が上級生に授業や実習について質問をする姿も見られ、新入生と上級生の学年間および他学科間の交流の場にもなっています。この料理教室が参加者の健康管理と新入生の仲間作りの一助になることを願っています。

県内外で進学相談会開催

進学相談会を県内外の８会場で開催し、本学の教育内容や入試情報、就職実績、学生生活など、受験生が知りたい情報を本学の教員が生でお届けしました。

八戸市（5/17）からスタートし、盛岡市（5/18）、仙台市（5/22）、秋田市（6/6）、弘前市（6/8）、青森市（6/9）、函館市（6/15）、山形市（6/23）、と順次開催。

会場には高校生や進路指導を担当する高校の先生のほか、父兄の姿も多く見られ、８会場で合わせて約250人の方が相談に訪れました。

今年度から始まるＡＯ入試に関する質問が多くの相談者から寄せられ、関心の高さが伺われます。

八戸会場

オープンキャンパスへようこそ！

イングリッシュ・カフェ

受験生にキャンパスを直接見てもらい、本学を理解してしてもらうため、６月25日(日)、オープンキャンパスを開催しました。

県内を始め、北海道・東北各県から高校生や父兄など大勢の方が訪れ、昨年を200人上回る約600人の方が参加。

午前中は各学科に分かれてのオリエンテーションや模擬講義、午後は各学科ごとの体験コーナーや相談コーナー、イングリッシュ・カフェ、大学院コーナー、サークル紹介など、参加した高校生たちはキャンパスライフの楽しさを十分味わったようです。

[大学院・学部編入学] 平成19年度入学者選抜試験のお知らせ

青森県立保健大学では、大学院及び学部編入学の平成19年度入学者を募集しています。詳しくは、大学院及び編入学の「募集要項」をご覧ください。

連絡先／教務学生課入試担当　TEL 017-765-2144　FAX 017-765-2188 E-mail nyushi@auhw.ac.jp

大学院(健康科学研究科博士前期課程･後期課程)

募集人員	健康科学専攻 博士前期課程 ･････････････････ 20名 博士後期課程 ･････････････････ ４名
出願期間	平成18年8月21日(月)～平成18年8月25日(金)
選抜試験	平成18年9月16日(土)
合格発表	平成18年9月26日(火)

学部編入学(健康科学部)

募集人員	看護学科･････････10名（3年次編入） 理学療法学科･･････ 2名（3年次編入） 社会福祉学科･･････ 4名（2年次編入）
出願期間	平成18年9月11日(月)～平成18年9月15日(金)
選抜試験	平成18年10月14日(土)
合格発表	平成18年10月24日(火)

人事異動

＜新任・転入等＞

人間総合科学科目 助教授

山田　真司　（ヤマダ　マサシ）

仙台平野、関東平野、石狩平野、再び関東平野と広い平野で暮らしてきました。コンパクトな青森平野は箱庭のようでちょっと不思議な感じです。現代版読み書き算盤を担当していますが、学生諸君の意欲の高さには感激です。

社会福祉学科 講師

坂下　智恵　（サカシタ　トモエ）

精神保健福祉が専門です。毎日、学生の皆さんからたくさんの刺激とパワーをもらっています。人材という宝を、本学でさらに磨いて送り出す、その一端を担うことになりました。どうぞ宜しくお願いします。

看護学科 助手

大津　美香　（オオツ　ハルカ）

３月まで県立広島大学に勤務していました。弘前出身ですので、この度県内に戻って来られたことを嬉しく思っています。これからは地元での教育や研究に頑張っていきますので、よろしくお願いいたします。

看護学科 助手

清水　健史　（シミズ　タケシ）

埼玉県さいたま市（旧大宮市）出身です。青森といえば、りんご、十和田湖、八甲田山しか知らなかった私ですが、こちらに来て、雲谷、合浦公園、ホタテなど身近で親しみやすい自然を満喫させてもらっています。どうぞよろしくお願いいたします。

看護学科 助手

舘　貴美枝　（タテ　キミエ）

本学の２回生です。学部より６年間見守って頂いた教職員の方々と共に働けることに感謝しています。しかし、助手として勤務することは初めてで緊張の毎日です。これからもよろしくお願いいたします。

看護学科 助手

行方　かおり　（ナメカタ　カオリ）

三重県出身です。青森での生活は初めてですが、充実した毎日を過ごしています。こちらに来て、青森の見所の多さに驚き、ますますこちらでの生活が楽しみになりました。

看護学科 助手

山本　加奈子　（ヤマモト　カナコ）

京都府出身で初めて関西を離れ、昨年青森に来ました。雪の多さに驚き、長靴の種類の多さに感動しました。今年は転ばずに雪道を歩くことが目標です。寒いのが苦手なので時々東南アジアのラオスに暖まりに行きます。

事務局 次長

神保　和則　（ジンボ　カズノリ）

晴れた日、麓から緑を増し残雪が少ない八甲田山が逞しい。日増しに彩りが移り変わるキャンパス。碧空に向かって聳え立つ樹々。卒業を迎える学生の姿が重なる。一歩一歩の成長。ステップアップ。

企画情報課 課長

蝦名　大和　（エビナ　ヤマト）

福祉行政に永く携わってきました。この度、大学事務局で企画情報の業務を担うことになりました。大学における組織運営が少しでもスムーズにすすめられるよう努めたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

法人移行準備室 総括主幹

石川　順一　（イシカワ　ジュンイチ）

永年、水産行政に携わってきました。本学の独立行政法人化に向けての仕事は山あり谷あり。小規模大学としてのメリットをどう活かすかが課題であるが、皆さんとともに良い方向へ進みたい。

健康科学教育センター 主幹

高坂　修一　（コウサカ　シュウイチ）

Ｃ棟研究棟の一番端っこ、「教育センター事務室」に陣取り、足早に学内を歩き回る毎日です。おかげで、着任２ヶ月で（これでも）３キロ減の快挙！
どうぞ遊びに来てください。

総務課 主査

三國　邦和　（ミクニ　クニカズ）

総務課（庶務担当）に配属になりました三國です。二十数年間病院関係で勤務してきました。現在の担当内容は20年前にやっていた業務ですが、記憶を辿りながらの毎日です。施設管理も担当していますので、いろんな場所に出現しますが、よろしく。

企画情報課 主査

古跡　健将　（コセキ　タケマサ）

復学を拝命しました。電磁波や轟音を背に過ごしている感ですが、資本は健康！青森では函館のほか、夜間等は首都圏、中部圏、近畿圏、福岡圏のラジオ局も受信可能なのが魅力ですね。教職員将棋倶楽部の皆様、対局はお手柔らかにお願いします。一刻千金も勤検力行の道！

企画情報課 主査

赤坂　太郎　（アカサカ　タロウ）

農林水産部農林総合研究センター畜産試験場から参りました。牛・豚・鶏・牧草の職場でしたが、今度は情報担当ですのでコンピュータの仕事です。学生さん並みに「勉強」しないといけません…勉強します。よろしくお願いします。

教務学生課 主査
川上　由紀子　（カワカミ　ユキコ）

体調を一時くずしたことから、体力作りの大切さを痛感！！　青森の豊かな自然の中で、山の芽吹き・深い緑・紅葉・冬景色と四季それぞれを楽しむことで励みたいと考えています。

法人移行準備室
松木　心一　（マツキ　シンイチ）

これまでと全く違う職場環境のため赴任当初は戸惑うことばかりでした。最近ようやく雰囲気にも慣れてきたところです。エンジン全開で仕事に取り組んでいきたいと思いますので、よろしくお願いします。

教務学生課 主査
蛯名　和子　（エビナ　カズコ）

４月から自転車通勤をしています。“風をきって颯爽と”はいかず、のろのろ運転です。でも浜館の田んぼ道はとっても気持ちいいですよ。仕事ものろのろですが、よろしくお願いします。

総務課 主事
藤田　真理子　（フジタ　マリコ）

これまでとは全く異なった仕事に、毎日パニック状態です。やることがいずこからが沸いて出てくるような…。とにかく今は目の前の書類を片付けるだけで精一杯です。

＜転出・退職等＞

中南地域県民局県税部長	鳥谷部　智	（事務局次長から）
中央病院主幹	成田　浩一	（事務局主幹から）
健康福祉政策課主査	天内　孝志	（事務局総括主査から）
健康福祉政策課主査	山本アユ子	（事務局主査から）
エネルギー総合対策局主査	上村　隆之	（事務局総括主査から）
中央病院主査	越前美奈子	（事務局総括主査から）
動物愛護センター主査	中嶋　朋子	（事務局総括主査から）

（退　職）	柏崎　勝	（事務局長）
（　〃　）	岡本　健	（事務局総務課長）
（　〃　）	中村　恵子	（看護学科教授）
（　〃　）	伊藤日出男	（理学療法学科教授）
（　〃　）	八戸　宏	（社会福祉学科講師）
（　〃　）	高橋　佳子	（看護学科助手）
（　〃　）	木浪智佳子	（看護学科助手）
（　〃　）	土井　一浩	（看護学科助手）
（　〃　）	坂井　郁恵	（看護学科助手）

＜昇　任＞

主事から主査へ　成田智佳子

講師から助教授へ　勘林　秀行
講師から助教授へ　藤田智香子

助手から講師へ　坂本　祐子
助手から講師へ　盛田　寛明
助手から講師へ　李　相潤

編集後記

《活彩保健だより》第14号をお届けいたします。

青森県立保健大学も、開学８年目を迎え、教育研究体制やさまざまな環境整備が、着実に進展しています。今年の冬は、例年にない豪雪でしたが、青森の街は、暑い熱気を爆発させる、「ねぶた祭」が間じかに迫っています。今年度からは、「活彩保健だより」の刊行を担当する、広報記録委員会の委員長は、松江一先生に代わり、大和田猛が担うことになりました。広報記録委員会委員の先生方や、事務局スタッフの方々と協力しながら、本大学の「活力ある、キャンパスの実状や行事、学生の活動、国際交流、就職や入学者選抜試験、大学院」などの生々しい情報をお伝えしていきたいと考えております。お忙しい中、原稿執筆に、協力していいただいた方々には本当に感謝申し上げます。

今後とも、よろしくご指導、ご協力、ご支援のほどお願い申し上げます。　（広報記録委員長　大和田猛）

◎ 広報記録委員会委員：大和田猛、竹森幸一、鳴井ひろみ、山下弘二、加賀谷真紀、廣森直子、森永八江、坂本芳人、蝦名大和、笹常春
◎ 広報記録委員会事務局担当：赤坂太郎、藤田真理子、蛯沢幸子

青森県立保健大学　〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000
編集・発行／青森県立保健大学広報記録委員会　大学ホームページ　http://www.auhw.ac.jp/
（バックナンバーもご覧になれます。）

この印刷物は2,000部作成し、印刷経費は1部当たり240円です。